



潮来絶句
唐麻呂作
小方辰政書

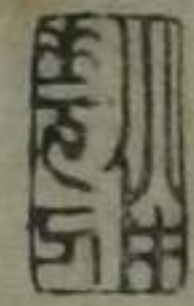
享和三年出版
後絶板
潮来曲後集卷
本曲享馬琴作

4653
7



4653

潮來絕句序



鄭也衛也其詞淫之湯古格探
而列之於典者所以觀夫風土
之懲醜而水必有其意於勸懲
惡也商羊之舞水浮實之溢
聖不遺焉所以其理之所
水也微於後來矣今富志人所

和廿三
十八

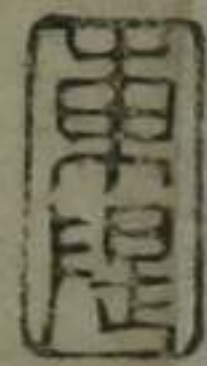
著潮來詞者。蓋古方人採風之
遺之也。潮來為地在水一方。妓家
之所聚。故其詞簡短而悲艷。其
調流暢而柔靡。且夫雪期雨約
之態。山拉之海盟之誓。莫不備寫
而悉記焉。已而都下之娼樓酒肆。亦
皆喜而詠之。山人每往。未於花柳

之陌。輒耳親聽之。故其為越於胞
寤。謔於筆者。躍之弗已也。雖
然。山人之寓意於此。蓋所以洩
夫抑鬱不平之氣也。古人有云。
山溪多異風。月惟同。右以遊治
事少。曰山人者。抑亦此所不知。人
也。歟。檢江漫士官醒之。翌緒於尚

窗底竹風蕭洒霞。



二 谷三丁寫



風雅體

富士唐麻呂著

潮来有洲刺溜也。世上多妓溜風
大流行。男自至于相奔誘。君子
憂之作此詩也。

○潮来有洲

○蕭菰優之

○菖蒲中華

愛之求之

○潮来有洲

○蕭菰周之

菖蒲中華

不謂流之

潮来有洲 二章 章四句

空外在飛鳥
 若能為言語
 相思妾与歡
 消息通各處



君為妾勞思
 妾為君傷神
 元關君與妾
 何為恨它人



暫時不相見。
 容顏異平生。
 容顏不啻異。
 漸々異心情。



志か
 あらゆる
 こと
 ありけり

夢裡阿郎見。
 明共咲言。
 覺了看左右。
 只是催淚痕。



あらゆる
 こと
 ありけり
 なまじり
 かな

此夜歡不來
 錦衾却任勸
 夢裡自相逢
 妾心聊解悶

ぬしは
 ちのむのハマヤ
 福のやうに
 あつた
 ちのむのハマヤ



昨夜逢阿郎
 合歡綢繆長
 却增今朝思
 鬢髻更難忘

やあーごらんぞ
 うれい
 ちのむのハマヤ
 あつた
 ちのむのハマヤ



欲謂復難謂
 我此胸臆中
 如何君不察
 却使妾轉窮



恍忽夢魂覺
 猶擁玉肌清
 正思有郎在
 只見余袖橫



くちがまじりて
幣ちりく

あけぬ
うらぬが

たのな
とさ

終宵暮妬疾。
背卧同床。
曉鴉落枕上。
漸和兩鴛鴦。



執

津

くさるものぞ

くさるものぞ

くさるものぞ

くさるものぞ

あけ

くさるものぞ

得媒聊欲告。
妾是眷戀情。
但親逢歡後。
心中盡思傾。



ちんちん
 日暮待歡至。
 倚欄對晚鴉。
 晚鴉飛本盡。
 低面獨長嗟。

ちんちん
 やつひ
 らぬ
 ちんちん
 ちんちん



郎君本輕薄。
 縱為輕薄兒。
 儂真戀慕憶。
 何乃君不知。

ちんちん
 ちんちん
 ちんちん
 ちんちん



心くさしよ

あはれこは

あはれこは

あはれこは

あはれこは

おろくくまうかのゆた

日 日 翠樓夕

妾上望依と依

只有相思切

不覺淚霑衣



あはれこは

あはれこは

あはれこは

あはれこは

あはれこは

あはれこは

あはれこはとひくちかあまを
欲別牽即裳
即聽心中事
唯喜實與真
何為言虚偽



柳亭陳人著
 あまらるゆあな
 まらるが
 まららあまらぬ
 つまらや
 朝々復々夕々
 菱枕各時新
 情願辞苦海
 歌求借老人



いぢぢぢぢ
 なまのふぢぢぢ
 めんまぢぢぢ
 エぢぢぢぢ
 めぢぢぢぢ
 儂言は眞實
 歡思是薄情
 難訴心中趣
 噫如乱絲縈



君心却似護
 不怨妾心切
 日一夜唯懷君
 賤妾無他慮
 於此夜唯懷君
 於此夜唯懷君
 於此夜唯懷君



奴一好之
 即歸一片舟
 妾送大江既
 至帆輪不住
 只見水空流
 只見水空流



鴉聲聞枕上
 雞鳴報曙暉
 可惡渡の心
 令郎夢驚歸
 去上



暫時思偃息
 閨中作假眠
 後見阿郎夢
 却令妾舞於



ぬ
おのれ
むす
よき
そそ

あつらふよりまての
情郎返去後
床中意持寒
轉展甲顧慮
只る夜余残



ほろ
おのれ
むす
よき
そそ

あつらふよりまての
情郎返去後
床中意持寒
轉展甲顧慮
只る夜余残

あつらふよりまての
情郎返去後
床中意持寒
轉展甲顧慮
只る夜余残



腎腸與心腹
說著話頭間
紅雙枕處
相見鴛鴦顏

あつと
まよひ
うらみ
うらみ



千辛復萬苦
今朝手親梳
嬾婉同床裡
雲鬢故乱紆

あつと
まよひ
うらみ
うらみ



妻倚阿郎膝
 守顔新相親
 含情三丁語
 菱眼只床頻



相逢菱蘭枕
 蒲桃儻語人
 偏愧同衾裡
 把袂掩朱唇



えんげん ちやうとん
 天邊 視 蜀 鳥
 まつとこれとやうに
 正 是 與 妾 聲
 あいあん せむ せむ
 哀 音 人 不 識
 ぬらや とせう せう
 日 夜 吐 血 啼

ころか
 ころか
 あれ ぼろぼろ
 なつて ころか
 つらつら



えんげん ちやうとん
 天 縁 与 時 節
 とらう まま きて きて
 到 来 待 得 邊
 とき とき とき とき
 時 節 何 日 到
 相 思 通 け 時

えんげん ちやうとん
 まつとこれとやうに
 ちやうとん ちやうとん
 つらつら



富士唐磨
 清看堤上青
 楊柳春風枝
 自與同心
 相與同心
 如人何
 清平飄起不



あふれ
 わのま
 可嬉逢郎夜
 可悲別郎時
 難奈賤妾意
 猶自增愚癡



るりけんを毎うととをうなひて世をうし海のうと見よ
きくわもま田河あからままのたつさ中とらりちん
めをつとく之法といふめ成をうしよれつひとまを
の人の専老女とてあま潮来うしよふらとを声えよくうし
此六世の人このおろの名いんぐ伊多古とめよびるきり
十五日くも梅若塚大念仏供養おろぐんともくせん久ざ
種あは田をみめぐりのあまのまね松籠をあまのり既その日
もれちう浅州寺のこのあま人かちのくはちのあけど花を
このあまうづはひあま来るひりの日うとありまのゆより

おり生まといふ南部編とくといぬのあかいらをを二つまか
ふまはるは二重のさぬの小袖おをりのさぬも同い色のあも
入るを長くびるを帯ハ瑞珀織といふれの甚盛のどたて
よこの信思さうらにましく又也腰のままかひしたんさの袋を
つけ能きたちをた領まへた項巾を被五む六むたうく
かまねさうら射のさうりをさうぐらぬこのをさかちよありけん
伊多古がかりたづり来て草の戸ほそほとくとおとづらう内ま
誰と子声くく戸ハ其のづらあねををさつと入りくえまを
ハ茅ぬくあけど枚のさうらけづまも清く庭の松はくは

ハおもてをアッるまゝうべれををそと取ハ名をそくはまゝなり
とそいふるまゝ、君がこゝろけりといふまゝあぢうといふあや
ほ子名をそ名あり、おつらひさうふ人もおれ茶のいほりこご
おつらひさうふりしより世の中またう男ありやあや
おつらひさうふをかかぬもごうまゝいひおれまゝのうれま
又あやとぬまうける画たふつあぢうまゝいひまゝを
まゝににおねどおれ人のほ子おれまゝのあやまゝ
形見 兼好もひらけり
産 何条 兼好もひらけり
てつらひさうふまゝいひまゝいひまゝいひまゝ

師 一のまゝいひまゝよのこゝろ世にせんこのまゝのまゝいひまゝ
そあはれるこゝろの曲たれらるといふまゝいひまゝ人情は通る
未曲 ちまゝいひまゝ
このまゝの章を俗ありまゝいひまゝいひまゝ男女の中をつ
くまゝのまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝ杜氏柿本
の揚をのまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝ
とあはれるまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝ
まゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝ
こゝろおがまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝ
こゝろおがまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝいひまゝ

おひさしをさくさくはくちらんとくくもみちあつらふらりおひさし
遊遊女うらめぬるひみありあるそのをいづはのうらめぬるうらり又
あさうたうきを費黄金さんといふをいづれて測測まのむむとらもいと
あさうたうらりとくおひさし又さうが死かきけよむれと
右うらめひたぬひさしうらりさうらりがく君ハそのむらあ
さうまのまや一日何がのまよとよげれ時めさあひぬとゆり
依依よせいさうさうもむあさうたうらり
いあさうらぬうちあつたあつらひさしうらり
うらりハをさうまあつらうらりめあつたあつた又たうきを合受る
黄金 ちんや

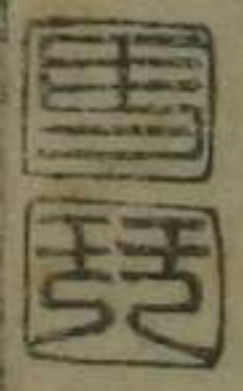
ころ男おありさくさくをさうまあつらひさし
いさくあや夜さうつたもさうまねや入るさうま女ハ男のさう
をさうかりさくさくおひさし
誓誓言ことさくさくおひさし
みさうらりかきさくさく情をさうまらむさうまをさうま
とけさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
かく男よりさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
まらさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
かりこの時おひさしをさうまあつらひさし又さうさくさくあや夜男

若人 わが 人 と り つ ま り ら ん ど よ う き き く こ ら ま し 師 を 得 たり 君
か き ん の ま の け り る 月 の 光 は ま よ む の 雪 と ま 晴
ぬ や ま り て 人 と 座 を ま り て 境 の 力 を 以 て 小 舟 を 操 り
こ せ ま り く ひ ら の 岸 ま り ぬ

富士山人 潮来絶句曲一卷を著このころ書肆を
此を懐中し兼て其の後筆を加人等を請よむ止と
を得たり後集數張をつらまき蛇足の辨を添ふ二
日許りて稿よりぬ書肆又来りて終りて集去り
餘臺 曲亭子

餘臺

曲亭子



便體

人の説を取て 吾説となれば 信天翁の食

田樂

人の作より吾作を奪ふれば

不如

扇の菓を嘗み似たり 坊賈 研書堂新鐫の小

冊一

巻あり目録 潮来曲といふ 業已子成り 后書

肆後

集を吾先生子續ふ事 更子迹の察之 寧

鶏

鏢の口となりし馬を牛車に後とあり 是以

先生

固辞 するを屢とふも 書肆敢て辞さば

終

り已てを得たりしを後と前小備

